検証 相模原殺傷事件 識者に聞く ④

地域、家族ごとの支援必要

「介助者」として活動する 渡邉 琢さん

事件で狙われたのは、社会とのつながりがほとんどない人たちだった。事件を起こしたのは容疑者かもしれないが、多くの障害者が大規模施設に入らざるを得ない社会をつくってきたのは、私たち一人一人の責任だ。

容疑者を免罪するつもりはないが、事件の背景となる社会の責任と課題は別に考える必要がある。亡くなった方々を、生きている間に地域で支え続けることはできなかったのか。自戒を込め、厳しく言えば、今まで見捨てておいて、いまさら追悼するのでは遅いのではないか。

私は大学院生だった2000年ごろから、地域で暮らす障害者の介助に関わっている。当初は、重度障害者が地域で1人で暮らすのは難しいだろうと思っていた。でも現に実行している人に出会い、行政に24時間の介護保障を求め、実現した。

それでも「知的障害者は難しいのでは」と考えていた。施設で暮らす人の割合は、身体障害者が50人、知的障害者は5人に1人と言われる。だが、こちらも実践している人たちに出会い、今は私たちの団体も力を入れている。重度の重複障害者でも地域で暮らす生き方は、少しずつだが広がっている。

事件直後、どんな方が入所し、どんなふうに暮らしていたのか知りたいと思い、現場を訪れ、元職員や入所者の家族から話を聞いた。容疑者の言動も含め「意思疎通ができない、施設でしか生きられない人たち」という刷り込みが社会にあるが、間違いだと感じる。狙われたのは本当に施設しか選択肢がない人たちだったのか。そこまできちんとのぼって検証すべきだ。

今、私の目の前には、身体障害者手帳1級と知的障害者の療育手帳第1種を交付され、重度の重複障害と言われながら1年半ほど前から1人暮らしを始めた青年がいる。一度は施設に入りかけたが、地域での自立を選んだ。「施設に入ると言葉を失う」と両親は言っていた。

彼とは一緒に夜の町に出かけ、レストランで食事をしたりしている。些細なことかもしれないが、奪われていたかもしれないこの光景の中に「尊厳」があるかもしれない。

「共生社会」と言葉で言うだけでなく、実体がある現実にしていかなくてはならない。24時間の介護保障が実現していない自治体も多い。一人一人が抱える課題を、地域、家族ごとに一つ一つ支援していく地道な作業が必要だ。その先に、重複障害者が夜の町で食事をしている光景がある。

わたなべ・たく 75年、名古屋市生まれ。日本自立生活センター（京都市）の介助コーディネーター。著書に「介助者たちは、どう生きていくのか」